姉貴探偵　(上)

はまっち

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
姉貴探偵　（上）

【Ｎコード】
Ｎ７０５５Ｖ

【作者名】
はまっち

【あらすじ】
えっとあらすじと言う名の自己紹介です（笑）僕は安藤隆、１４歳の中学３年。あだ名は『アンドリュー』
ほんで、下着盗まれて「探偵して犯人捕まえてやる！！」って張り切ってるのが姉貴の安藤夏、１７歳の高校３年生。あだ名は『なっちゃん』。弟の自分が言うのもなんだけど結構かわいいしプロポーションもいいけど…もう少しやさしければなぁ～（これを正面向かっていう勇気はない）
このコンビで犯人を捜していきますということで本編をお楽しみく

ださい。

下着が無い！！　犯人は？　釣る！！

―1―

「ねえ！ちょっと！あたしの昨日干した下着がない！！」
僕は朝ごはんを食べながら飲んでいたイチゴ牛乳を吹いた。
ＴＶでは女の人が『何で胎児エコーがポルノなのよ！』とキレていた。
「ったく姉ちゃん、朝っぱらからなんだよ！！」
「あんたこそ何よ！こっちはマジなのにイチゴ牛乳吹くって」
「いや、普通吹くでしょ！いきなり下着がないって吹くでしょ！」
「うっさい！ドーテー！！」
「何でそうなるんだよ！つーかタンスの中とかに他の下着ないんかよ！！」
「タンスの中にあるよ、他の下着！だけど…あの下着、勝負下着だったんだもん」
「しらねぇよ！てか、それとドーテー関係ないだろ！」
「そんなにムキになるってことは…そういうことね」
「中学生で童貞とか普通だろ！？」
「うるさい！アタシは中２で初体験したけど！？」
「そんなだから勝負下着盗まれんだよ」
「ドーテーは黙っとりんしゃい！！」
「なんだ、休日の朝っぱらから喧嘩かよ…しかも中２で初体験とか始めて聞いたぞ！！父さんはそんな子に育てた覚えはない！」と言いながら父さんがリビングに来た。
祝日は法定外休日でも父さんの会社は休日だ。待遇のいい会社だ。
まるで学生だ。
「だって、こっちは真剣に下着がないって言ってるのにイチゴ牛乳吹いたんだもん、つーか黙れジジイ」

「いきなり姉貴にそんなこと言われたらビックリするじゃん、つーか喧嘩に首突っ込むなジジイ」
「2人とも、喧嘩はやめなさい！ついでに父さんをジジイって呼ぶのもやめなさい！せめて…オッサンにしてやんなさい！！」
「いや、大して変わらないから、それ」
「母さん、ゴメン…」
「ごめんなさい」
「ちゃんと謝ればいいの、祝日で休みでも朝ごはんはちゃんと食べなさい」
「はぁい」
「いや…ちょ、父さんには謝らないの？」
「え、謝ったし」
「うん」
「ま、いいや。で、それ警察に言ったの」
「言えるわけないでしょ！恥ずかしい！！」
「じゃあ、姉ちゃんどうすんだよ、泣き寝入り？」
「んなわけないでしょ！ちゃんと考えてあるわよ」
「なんだよ」
「探偵をやるのよ、あんたどうせ暇人でしょ、手伝いんしゃい」
「嫌だ」
「やれ！わかったね！文句は言わせないよ」
「は…い」
「分かればよろしい」
「鬼みたいな姉だぜ（ぶつぶつ・・・）」
「なんか言った？」
「いいえ、何も！」
「なら、あとで♪」

―2―
数分後…

『コンコン（ノックの音です）』
「姉ちゃん？」
「うん、入るよ」
「いい（ガチャン）よ」
「いいよって言い終わる前に入るんだったら…何でノックしたん？」
「いや、一応念のため…お取り込み中だったらまずいし？」
「だったらいいよなんて言わない」
「だよね～（笑）ひょっとして下着盗んだのあんた？」
「は？なわけないし！」
「盗んでなくても、使ったことあるでしょ？」
「何に？」
「ナニするのに」
「な…ないわ！（やべえ！図星やん）助手降りるよ！つーか姉ちゃん一人で大丈夫じゃね？」
「ジョークよ（笑）ちょっと！降りんで！…てか、か弱き乙女に一人で下着泥の犯人を捜せって！？何言ってんの？」
「姉ちゃんがか（ここでか弱きぃ～乙女だって！？はぁ？とかいったら軽くシバかれるな…）わいいのは知ってます、手伝いますよ。はい」
「よし、ちょいちょい間があったのは気になるけど良かろう。ってことで、まずは作戦会議だね」
「うん」
「で…使ったの」
「ま…まあ、使ったコトなくはないけど」
「ふ～ん、やっぱりあるんだ…まあ、助手やってくれるし、盗んでもなさそうだから許す」
「あざっす」
「まあ、持ってって使うのはいいけど…そのままタンスに入れたら、分かってるね？」
「大丈夫、洗濯籠に戻すから」

「えっと、使ったときは洗濯籠から盗って、ヌいて、戻したってコト？」
「ＹＥＳ」
「…まぁ、盗まれたのは干してあったのだけど、なにやってんの？」
「変態という名の紳士…あ゛！痛い！！いだいよ姉ちゃん！」
「一応調べる、文句は言うな」
「あ、そこは…」
「ベッドの下にエロ本とかどんだけベタな隠し方やねん！！」
（十数分後…）
「よし、どこにもあたしの下着はないから許す！」
「ほっ…やっと開放された～。で、何で亀甲縛りで縛ったの？」
「何でって、なんとなく」
「カレシとかにもそうやってんの？」
「やるわけないでしょ！バカチン！！」
「え～」
「な…何よその疑ってる眼は」
「ま、いいや。で、どうする？」
「むぅ～ん、どうしよ？」
「どうしよもこうしよもなくね？」
「じゃあ、あんたには考えはあるの？」
「ＹＥＳ」
「なによ」
「隣のおばさんに聞く」
「もう一回亀甲縛りしたろか（ー＿ー＃）」
「え、隣のおばさんなら犯人見たかもしれないでしょ？」
「で？女性エイトとか週刊主婦とかに投稿されたり、地域に言いふらされたらどうすんのよ」
「いいじゃん、警戒態勢も強まるし、オバちゃんの力は強いでしょ？」
「そういうの嫌だもん、めんどくさい（と言いながら紐に手をかけ

る）」
「わ…わかった、そういうってコトは姉ちゃんもいい考えがあるってことでいいの？」
「当たり前じゃん！何言ってんの？」
「なんなの？」
「下着と手作り菓子で釣る」
「は？何？」
「下着の横に『下着泥棒ご苦労様です』って言う手紙と手作りの菓子を置いて釣る」
「釣るって、釣果はどうやって確かめるのさ」
「そんなの決まってるじゃないの、赤外線カメラよ」
「イノシシ狩りかよ！」
「下着泥棒なんてイノシシと一緒よ」
「ふうん」
「じゃ、いくよ」
「どこへ？」
「テレビ局のアンテナショップと下着店」
「何しに？」
「米粉と下着買いに」
「なんで僕も行かなかんの？」
「米粉買うから、ついでに下着も選べ、変態！」
「わけわからん」
「とにかく行くよ、ついでにお茶おごるから来い！」
「へいへい」
ということで家を出て町へ行くために最寄の駅に向かった。

―3―

ということで最寄の駅から那古町へ向かう快速に乗ったら、次の駅でテレビで見たことのある芸人さんが乗ってきた…テレビカメラ

もいるし何のロケだろうか？あ！こっちにきた！！
「姉ちゃん、この子カレシ？」
やべ！隣で姉ちゃんが話しかけられてるし！ひょっとしてカメラに映ってる？
「カレシじゃなくて、弟です～」
「は～、弟さん！そうでっか。良かったナァ～、美人の姉ちゃんで」
え、ボク…ハナシカケラレテル？
「え、あぁ、はい。良かったです」
「で、何しにいくの？姉弟デート？」
「ま…そういう感じです」
「ほうほう、そっか」
「はい」
「おっちゃんたち、テレビのロケやってんねん、これ番組ステッカー、あげるわ」
「あざっす」
「深夜やけど、土曜やし良かったら見てな」
「はい」
「ほなな～」
「さよなら～」
ということで『ごぶなが』ってかいてあるステッカーをもらった。
深夜番組か、いつもなら寝てるけど今度は見てみよ。
そしてなんやかんやで那古町に着いた、１０ｋｍぐらい離れているウチからも見えるでっかいビルがボコスコ建っている「で、先にどっちいくの？」
「お腹も空いたし、とりあえずご飯食べよ！おいしい店知ってるんだ♪」
そういって駅の中の通路を進んでいく、いったいどこへ行くのか？
「ほい、着いた」
ということで駅の中の洋食屋でランチを食べた。オムライス&コロッケランチ（９８０円）確かにおいしくて場所的にもそこそこ安い

って思った。
「ふぅ～、お腹一杯♪」
「うん、で…どっちを先にする？」
「下着のほうがいいでしょ？米粉持って買い物とかダサいし」
「だな」
そして、とくとく乗り放題切符を買って僕達は電車に乗った
「お客さん、終点ですよ」
乗ってる間に寝てしまったのだろう。電車は終点の山に挟まれた小さな町についていた。
「え！あ…ホントだ！姉ちゃん、起きて！終点だよ！」
「あ、ホントだ…すみません」
「え、はい」
そして、逆方向の電車に乗り換えて２０分弱でやっと本来の目的地の坂江町に着いた。
そして、僕達はデパートへ行って下着売り場へ向かった
「姉ちゃん、やっぱり超恥ずかしいんだけど」
「恥ずかしいなら早く選ぼ♪で、タカシー、このピンクの下着どう思う？かわいくない？」
「う…まあまあ（やっぱ姉ちゃんのプロポーションはいいんだな…あんなにウエスト細いのにＥカップとか）」
「まあまあ？じゃあ、他にいいのあるの？」
「え…ピンクならこっちの薄いピンクのほうがいいと思う」
「ああ、こっち？そうね…じゃあ、これにしようかな」
「選ぶの早っ！！」
「まあ、意見は尊重するつもりだったし」
「はぁ」
「いいでしょ、お昼ご飯おごったげたんだし、この後でお茶おごったげるから、あとほんとに恥ずかしそうだし」
「う…うん」
ということで、第一の買い物を済ませて、カフェ・ド・ほうれん草

という店でお茶をした。ケーキはほどほどの甘さでおいしかった。
あと、店員さんがハーフっぽい顔でめっちゃかっこよかった。
「ふー、やっぱタピオカはおいしい♪」
「あんたって、ホントにタピオカ好きよね」
「だって、おいしいもん。てか、米でお菓子ってなにつくるの、せんべい？五平餅？桜餅？」
「いや、米粉っていったじゃん」
「ああ、で、なに作るの？」
「アンドーナツ」
「は？」
「米粉を使ったアンドーナツ」
「はあ…ひょっとして、だじゃれ？」
「ＹＥＳ！」
「しょうむな…他に何か作らんの」
「ああ、それとクッキー」
「ふーん、でなんでＴＶ局なの？」
「そりゃ、ＴＶ局で作られたそこでしか売ってない米粉で作るからよ」
「なるほど（どんな米粉やねん）」
「あ、早く行かないと閉まっちゃう、いくよ」
ということでＴＶ局へ向かった。

―４―

「あ、よかったｗｗあった」
「姉ちゃん、これ大丈夫なのか？」
その米粉のパッケージには『怪しいお米セシウムさんで作った米粉』って書いてあるのだ…
「どう見ても怪しいです、本当にありがとうございました。」ってぐらい怪しいのだ。てか…さ、怪しいお米ってなんだよ！！

「まあ、大丈夫っしょ」
「まじで？いや、どう見ても怪しいじゃん」
「大丈夫だって、コソ泥に食わせるんだし」
「いや、そういう問題じゃないでしょ」
「つーか、普通に売っているってことはたぶん大丈夫だわ」
「そうなる？」
「そうなるでしょ」
「ふーん」
「買いたいものも買ったし、帰るよ」
電車から見る夕暮れの町はとてもきれいだと思った。
〜ブーブーブー（マナーモードのバイブ音です）〜
「あ、メールだ」
「ん？誰から？誰から？」
「えっと、彼女…あっ！」
「どりどり？『ターちゃん、こんばんちは（夕方だし）、来週のデートなんだけど…どこいく？』だって」
「ちょ、姉ちゃん勝手にメール見ないでよ」
「えっと、『家デートはどう？』っと送信」
「しかも勝手に返信しないでよ（ー｜ー＃）」
（ガタンゴトン、ガタンゴトン…ブーブーブー）
「あ、メールだ」
「よかったじゃん、『いいよ♪』だってさ、ちゃんと部屋かたづけろ」
「わかってるし、さて返信せねば…『じゃ、うちで（言いだしっぺは姉ちゃんなんだけど）』送信」
「いや、そのカッコの中いるか？」
「いらないか？」
「いらないだろ」
「書いたもんは仕方ない…あ、返信きた」
「どりどり？」

「姉ちゃんには見せんよ、どうせ『や・ら・な・い・か』とか返信するんでしょ？」
「ち、ケチんぼ」
『ターちゃんのお姉さん面白いねｗｗｗ了解です（＾３＾）ゝじゃ、また明日～』
「『うん、面白いけどちょっとめんどいかなｗｗｗ今度うち来るときのお楽しみにしといて（≧≦）
じゃじゃっ！また明日～（＾∀＾）／゛』っと、送信」
（ガタンゴトン「まもなく～、すみれが丘、すみれが丘です。お出口変わりまして右側の扉です。
開くドアにご注意ください。すみれが丘の次は運動公園前です。」）
「（電車が出て行く音が聞こえる）そういえば、メールは？」
「終わったよ、別に学校で会うし」
「ふーん」
さて、作戦も決まり準備も出来たが…ここからどうなっていくのでしょうか？そして犯人は誰だ？（続く）

下着が無い！！　犯人は？　釣る！！（後書き）

えっと、お読みいただきましてありがとうございます。いかかでしたでしょうか？　犯人にはこれから少しずつ近づいていく予定です（たぶん）

続きをお楽しみに。あと良かったら感想お待ちしてます。ではでは

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7055v/

姉貴探偵　(上)

2011年8月12日03時25分発行